『親敵討腹鞁』論

――兎のキャラクターについて――

古庄るい

はじめに

安永六年（一七七七）に朋誠堂喜三二は恋川春町の影響を受けて、初めて黄表紙作品を六部世に送り出したという。そのうち、最高傑作と評されてきたのが『親敵討腹鞁（おやのかたきうてやはらつづみ）』である。鱗形屋孫兵衛版で上下二巻二冊。作中の画は恋川春町によるものである。

『親敵討腹鞁』は当時の人気も高く、式亭三馬所撰名作二十三部の一つにも入っている。[注1]「かちかち山」の絵本文芸の比較における先行研究としては、『むじなの敵討』と赤本『兎大手柄』の比較、あるいは、赤本、青本・黒本、合巻、豆本の昔話「かちかち山」を絵本化したもの同士の比較はされてきたようだが、これらの昔話に沿った絵本と、『親敵討腹鞁』のような黄表紙のパロディ作品との比較研究は現段階ではあまり行われていないようである。その理由は、昔話に登場する人物が黄表紙の作中にも登場したとしても、黄表紙のパロディ作品の物語内容自体は昔話のと大きく異なる為に、内容比較をすることは難しいからかもしれない。

しかし、昔話に沿った作品とパロディ化された作品において、共通して登場する特定の動物のキャラクターに注目して比較調査することは、当時の江戸の人々の動物のイメージがどのようなものであったかを明らかにするためには重要なことであろう。

本稿では、赤本『兎大手柄』と黒本『かち〳〵山』、そして黄表紙『親敵討腹鞁』のそれぞれの兎を比較し、『親敵討腹鞁』の兎がこれまでの「かちかち山」の絵本の兎とどのように違うのかという点について考えていきたい。

特にそれぞれの作品に登場する兎の性格と肉体的特徴に着目し、『親敵討腹鞁』の兎特有のキャラクターを明らかにした上で、それらが当時の江戸の人々の兎に対するイメージとどのように関わっていたのかということについて考察する。

表一は刊行年、性格、肉体の描き方の三点に注目して、三作

品の中に登場する兎の特徴を比較したものである。それぞれの特徴における分析については、各省で述べていく。なお、表の刊行年の箇所は『草双紙事典』（東京堂出版、二〇〇六年）を参考にした。

第一章　性格

本章で述べる「性格」とは狭義的なもので、いわゆる兎の内面的な特徴のことである。

黒本『かち〳〵山』の兎は、犬や猫に頼まれて「おれにまかせておかつしゃい」「このみゝながのものさへきいてきのどくひとしやんのこさろう」（この耳長の者さへ聞いて気の毒、一思案の御座ろう）と言って婆の敵討ちを引き受けるという場面があることから、③正義感だけでなく、頼もしさもあると考えられる。また、物語の後半は『兎大手柄』と同様、狸を騙しつつ敵討ちをすることから、④賢さや狡猾さもある。

そして、黄表紙『親敵討腹鞁』の兎は子狸の兎への敵討ちを知った後、身の安全を祈るため、浅草観音に詣でることから、⑤信心深さが伺えるが、その直後に「尻喰らえ観音〳〵」と寺の階を下りるところで、⑥間抜けなところ、あるいは本来信心深くないところがあると考えられる。また、表には記載しなかったが、兎が仏頼みであること、中田屋にかくまうよう助けを求めることなどから、先に述べてきた赤本、黒本の「かちかち山」の兎に比べると、頼りなさを感じさせる性格でもあると言える。

表一

	刊行年	性格	肉体
赤本『兎大手柄』	不詳 ＊赤本・宝永（一七〇四年～一七一一年）～享保年間（一七一六～一七三六年）頃	①婆の敵討をする →正義感 ②狸を騙す →賢さ・狡猾さ	⑧耳が滑らかな曲線 ⑨筋肉質な肉体 ⑩頭（全身）が白い
黒本『かち〳〵山』	不詳 ＊黒本・青本延享元年（一七四四年）～安永三年（一七七四年）	③猫と犬に頼まれ、婆の敵討ちを引き受ける →正義感・頼もしさ ④狸を騙す →賢さ・狡猾さ	⑪耳周りがふさふさ ⑫筋肉質 ⑬丁髷がある
黄表紙『親敵討腹鞁』	安永六年（一七七七年）刊	⑤浅草観音に身の安全を願う →信心深さ ⑥尻喰らえ観音→間抜け・不信心 ⑦孝心の為に自ら切腹する →正義感	⑭耳周りがふさふさ ⑮細身 ⑯頭が黒い

一方、最後の場面で兎が子狸や爺の息子軽右衛門の孝心の為に自刃するところでは、⑦心根の優しさからくる正義感が伺えるし、また、中田屋に鵜と鷺の姿になって恩返しをするところからは人情味が伺える。

ここまで三作品を比較したところで、共通点と相違点が見えてきた。三作品とも共通していると考えられるのが正義感である。赤本『兎大手柄』と黒本『かち〳〵山』で共通するのが賢さ・狡猾さである。

相違点としては、黄表紙『親敵討腹鞁』の兎は他の二作品と比べると、全体的に頼りなさを感じさせる性格となっている。これらの特徴を見ていくと、日本人が持つ兎のキャラクターのイメージを知ることができるのではないだろうか。ここまで取り上げてきた点について、以下それぞれ考察していく。

㈠正義感

昔話「かちかち山」の兎に正義感のイメージが与えられているという背景には何があるのだろうか。

石上七鞘氏は次のように分析している。

昔話「かちかち山」の分布は全国的であり、その点で、日本人には普及した口承文芸とみられる。けれども、ことに分布が平坦農村つまり水田耕作地帯を占めている点で、兎が豆を食うのに悩まされる畑作地帯と異なって、兎の害に悩んでいない土地では、兎の狡猾者から一転して正義漢となる風土で〈かちかち山〉が成立したことを考えさせるのである。つまり害を与えぬ水田地帯で、兎は悪者から善行をするものに転化しえたといってよいのである。[注3]

この「善行をする」兎というイメージは、『大唐西域記』に収められた、兎が帝釈天の為に自ら火の中に飛び込みその身をささげようとした仏教説話によるのではないか。この説話は『未曾有経』『法苑珠林』『塵添壒嚢抄』にもあり、兎に関する民俗の研究でも、多く取り上げられている。[注4]そして、『今昔物語集』巻第五「三獣行菩薩道、菟焼身語第十三」にもこの物語が翻案されている。

この説話に登場する兎について、鈴木健一氏は『鳥獣虫魚の文学史』で次のように述べている。

ここには、兎が発揮した自己犠牲の精神をもって人々を教導する仏教的な姿勢も認められよう。(〈人の心の鏡〉)。また、兎のけなげさが人々の心を打ち、人間にとって身近な話として受けとめられもしたという点では、後述するキャラクター化の走りと言えるかもしれない。その一方、人間が理性によってできない行動—自分の命を犠牲にして、他者を救済する—を動物ならしてしまうのかもしれないという気持ちもこめられていよう。そこには、〈神への回路〉とも、〈自然の力〉とも言いうるものも存在していると思われる。[注5]

この論から「三獣行菩薩道、菟焼身語第十三」に登場する兎には、人間の在り方を「教導」する要素の他に、神性や自然性も兼ね備えているということが確認できるが、特に「自己犠牲の精神」という点でいえば、『親敵討腹鞁』の兎が子狸や軽右

衛門の為に自ら腹切りする場面を連想させる。

また、「善行をする」兎に関連して、中村禎里氏は、継母の計略で野原の穴に生き埋めにされた子の叔父がその野原を通る時に兎が飛びだし、その兎を射損ねた矢を拾いに行くと、生き埋めにされた男の子を見つけ、助け出すことができたという話である『今昔物語集』巻二十六「陸奥国府官大夫介子語第五」と兎皮を剥がした大和男が皮膚病を患う話である『日本霊異記』上巻一六「无慈心剥生兎皮而現得悪報縁」を、「善の象徴とみられたウサギの説話」[注6]として取り上げている。

中村氏が挙げたこの二つの説話は兎の意志によるところのものではないが、これらの話で兎は善の存在であり、正義に属するものというイメージを与える。

ちなみに、兎が「善」とするイメージの背景には兎が白い動物だということがあるとする説がある。小林祥次郎氏は「白い動物は祥瑞である」[注7]と述べており、中村氏は日本のノウサギの多くが、日照時間と気温しだいで規則的に白化することを指摘し、「日本のノウサギそのものが、瑞兆ひいては善の象徴とみなされた」[注8]と述べている。

ここまで、兎に正義感（善）をイメージ付ける説話や物語を見てきたが、次の項目で述べる㈡賢さ・狡猾さと比べると、兎の生態において兎が正義の生き物であるという証明は難しく、説話など、想像の中でキャラクター付けされているようだ。

しかし、説話において「正義」や「善」の動物として扱われるようになったのはなぜだろうか。その根本にあるのは、白という色そのものに黒の「悪」に対する「善」というイメージがあり、小林氏や中村氏が述べているように、その白色の身体を持つ兎も「正義」や「善」の動物としてイメージされるようになったというのが有力なのではないだろうか。

㈡賢さ・狡猾さ

続いて、兎の賢さ・狡猾さという点について検証する。小林氏は「民話のカチカチ山でも、兎は、正義でもあるが狡猾である」[注9]と述べている。

「かちかち山」以外での兎が賢い、狡猾であるということを示す言葉や物語は、兎の正義感という要素以上に多くある。そこで、ここでは「かちかち山」以外の兎がどのように狡猾な動物として描かれているのかを見ていく。

まず、狡猾な兎を描いた最も有名な神話と言えば、「因幡の素兎」伝説であろう。

石上七鞘氏は兎の賢さという点について、白い動物が持つ吉兆、霊のイメージが賢さと繋がり、因幡の白兎は毛色が白いことに意味があり、鰐ざめを欺くことができたのも、必ずしも悪役とだけでは説明しきれない[注10]と述べている。

しかし、この「白兎」の解釈については、別の解釈もあるらしい。今橋理子氏は『古事記』では「素菟」と表記されていることを取り上げ、「素」とは素足や素手と同じように「裸」を意味することから、因幡の兎は毛皮を剥ぎ取られた状態の兎を意味していた[注11]と述べている。

ただし、いずれにせよ鰐を騙して島から気多の前まで渡ろう

としたという狡智さは、兎のイメージをある程度定着させるものであったと言える。

次に、因幡の素兎以外の物語にも注目する。「かちかち山」以外で兎が登場する昔話の型に「動物分配」がある。関敬吾氏『日本昔話大成』（角川書店、一九七九年）によると、大きく二種類に分けられる。

〈動物分配〉

A狸（国によっては猿）と兎と川獺

とある人から塩と豆と小豆飯（藁座）を得て、兎の発案により三匹でわけあう。川獺は塩、兎は豆、あともう一匹は小豆ご飯か莫莚をもらう。しかし川獺と狸（または猿）はその得たものでそれぞれ失敗をする。兎が一人豆を得て得をしていると抗議しに行くと、兎は食べた豆の殻を自分の体にくっつけて、出来物（疱瘡、蕁麻疹）になったといって、残りの二匹を欺く。

福岡、高知、愛媛、広島、岡山、鳥取、兵庫、京都、滋賀、岐阜、福井、石川、新潟＊福島では兎自身も失敗している。[注12]

B狐と狸と兎

狐が得物（重箱の中身）を分配する際に、知恵を働かせ中に入っていた手紙を読み上げ、他の二匹よりも多く取り分を持つ話。福岡、大阪、京都、滋賀、山梨、新潟

動物分配の内、Aは兎の狡猾さを表している物語の例と言える。ただし、Bのように他の動物と共に騙される側としても描かれている場合もある。

また、狡猾な兎が登場する昔話として、先述した「兎と熊」があるが、その内容は「かちかち山」において狸が兎に騙されて火傷をする場面から土船に乗って溺死するまでの場面と同じ内容で、狸の代わりに熊が騙されるというものである。関氏によると、青森県三戸郡や岩手県岩手郡、福島県南会津郡、長野県下水内郡、新潟県北魚沼郡などにこの話が伝わっているという。[注13]

ここまで、兎の狡猾さに関わる話をまとめてきたが、これらの他に「狡兎」という言葉もあるという。小林氏によると、「聴覚が鋭く、田畑を荒らし、足が速く、多産であることなどから生じたのであろう。空海の『三教指帰』（下）に、『缺けたる歯疎そかにして狡兎の唇の若し』とある」という。[注14]

『故事・俗信・ことわざ大辞典』によると、狡兎という言葉を使ったものとしては

「狡兎三窟」「狡兎死して走狗烹らる」「狡兎尽きて良犬烹らる」の三つがあり、それぞれの意味は次のように説明されている。

〈狡兎三窟（さんくつ）〉

・兎はいざというときのために多くの逃げ道を用意しておくということ。用心深いことをたとえていう。出典「狡兎有二三窟一、僅レ免ニ其死一耳」〔戦国策―斉策・閔王〕

・狡兎死（し）して走狗（そうく）〔良狗（りょうく）烹（に）らる

獲物の兎を捕らえられて死ねば、猟犬は不用となり、煮て食われる。敵国が滅びれば、それまでてがらのあった智謀の家臣は邪魔にされて殺されてしまうということをたとえていう。

・狡兎尽きて良犬烹らる→飛鳥（ひちょう）尽きて良弓蔵る。「狡兎尽きて良犬烹られ、飛鳥尽きて良弓蔵めらるるの如く」〔伎・会稽源氏雪白旗―中幕〕出典「狡兎尽即良犬烹、敵国滅則謀臣亡」〔韓非子―内儲説・下〕「蜚鳥尽良弓蔵、狡兎死走狗烹」〔史記―越王勾践世家〕[注15]

一つ目に挙げた「狡兎三窟」について、南方熊楠は次のように述べている。

『本草綱目啓蒙』〔小野蘭山　享和三年～文化三年（一八〇三～一八〇六刊）に兎の性狡にして棲所の穴その道一ならず、猟人一道を堙れば他道に遁れ去る、故に『戦国策』に（狡兎三窟ありわずかにその死を免れ得るのみ）という。兎は後脚が長くてすこぶる迅く走りその毛色が住所の土や草の色と至って紛らわしき上に至って黠く、細心して観察した人の説にその狡智狐に駕すという。[注16]

また、『和漢三才図会』にも兎の異種として、「狡兎」がいたことを挙げている。

『本草綱目』（獣部、獣類、貘〔付録〕）に次のようにいう。狡兎は毘吾山（『山海経』）に生棲する。形はに似ていて雄は黄色、雌は白色。丹石銅鉄を食べる。昔呉王の武庫の兵器がみな尽きたとき、土を掘ると二兎を得た。一は白色で一は黄色であった。腹中の腎・肝はみな鉄であった。これを取って鋳て剣としたが、玉が泥のようにすぱすぱと切れた、と。『五雑組』に、「狡兎は鷹が襲いかかってくると仰むきに臥して足で爪をつんざきこれを裂く。鷹は即死する」（物部一）とある。[注17]

赤田光男氏によると、「狡兎はある時は巧妙に逃げ、またある時は勇敢に戦う兎として認識され、戦士の戦さの道理にも採用された」[注18]という。

これらのことから、「狡兎」という言葉にも表れているように、兎の狡猾なイメージのもとは、兎の生態に由来すると言えるのではないだろうか。だからこそ、神話や昔話だけでなく、俗諺などにも多く狡猾なイメージを与えるものが伝わっていると考えられる。

㈢間抜け・不信心・頼りなさ

最後に、『親敵討腹鞁』の兎に見られる間抜けさ、不信心などからくる、全体的な頼りなさについて考察していく。

まず、間抜けな性格を表わす物語としては、先ほど取り上げた「因幡の素兎」と「動物分配」の昔話のBパターンを取り上げる。

「因幡の素兎」では、鰐を欺いて気多の岬へ渡り終えるあと少しの所で、事実を鰐に伝えてしまう点は、兎の抜けた部分であると考えられる。また、鰐に毛を剥がされた後、大国主神の兄弟に騙されて身体の皮膚を傷めて苦しむというところは、簡単に騙されてしまう間抜けさがあったとも言えるのではないだ

ろうか。

もう一つの「動物分配」の昔話のBパターンの内容は先に記した通りである。

これらの神話、物語の中での兎の間抜けさは、最後に気を抜く、あるいは他者に騙されて損をするというところにあると考えられる。

『親敵討腹鞁』の兎の間抜けさの場合には、この後に述べる「尻喰らへ観音」と関わるところであるが、せっかく浅草観音に頼んで身の安全を願ったのにもかかわらず、帰りの行動で無駄になってしまうところに間抜けな要素がある。神話や物語と全く同じ質の間抜けな要素とまでは言えないが、兎が間抜けであるという弱い要素を持つイメージに間接的な影響を与えていると言えるのではないだろうか。

では、不信心、全体的な頼りなさについて「尻喰らへ観音」という言葉に注目してみる。『親敵討腹鞁』では、観音に参拝した後、階を降りる時に兎がこの言葉を口にする。

小林氏は「尻喰らへ観音」の語について、次のように紹介している。

「尻喰らえ観音」という諺が、『玉塵抄』一五六三（四〇）以下に見える。困った時の恩を忘れることに言う。『後撰夷曲集』（夷歌式・一七一五・注）に、「この尻喰らへ観音といふことは、兎、前足の短ければ、下り坂には過ちなきやうにと観音を頼み奉り、上り坂の時は我が得手になるに任せ、さ言ひて走る由、古来より世話（諺）なり」とある。貝原益軒『大和本草』（一六）に「前足短キ故、上リ坂ヲ喜ビ下リ坂ヲ畏ルト云フ」とあり、人見必大『本朝食鑑』にも、前足は短くて山を上るには捷軽であるが、山を下るにはやや劣る、とある。[注19]

このことから、「尻喰らへ観音」の言葉の由来は兎の肉体的特徴と密接に関わっていることが分かる。

この他、「尻喰らへ観音」と似た言葉として、「兎の上り坂」や「兎の股引き」という兎に因んだ諺もある。[注20]

したがって、これらの語から当時は不信心であるというイメージや、事の前は良くても事が終わると頼りにならないといったイメージが兎にあったとも言えるのではないだろうか。

また、中山右尚氏は喜三二が作中に「尻喰らへ観音」を用いたことについて、「これは上り下りが、（三）の場合と逆（観音堂の階段を降りる時に「しりくらえ」といったのだから）だが、それを措いて考えて見ると、双方は実によく似ている。作者はまたこの語源説の如きをも知っていたのだろうか」[注21]と述べているが、先述したように、当時の様々な用例や類語があったことからして、喜三二がこの言葉の語源をある程度知っていた可能性もあるだろう。

以上のことから、『親敵討腹鞁』の兎のキャラクター付けにおいて、この「尻喰らへ観音」という言葉は重要な要素であったと考えられる。

ここまで、赤本『兎大手柄』と黒本『かち〳〵山』、黄表紙『親敵討腹鞁』の三作品における兎の性格について考察してき

た。赤本『兎大手柄』と黒本『かち〳〵山』は昔話「かちかち山」の物語絵本である為に、両作品において大きな性格の違いはないが、やはり改作である『親敵討腹鞁』と比較すると前の二作品との兎の性格の違いは大きい。

ここで改めてその違いについて整理する。前の二作品の方には正義感だけでなく、賢さや狡猾さがある。一方の『親敵討腹鞁』の兎には、その賢さ、狡猾さの内、特に狡猾さという性格が抜けており、代わりに間抜けさや不信心といった頼りなさが加えられている。しかし、そういったマイナス面だけでなく、狸や軽右衛門の孝道を立てるため、自ら腹を掻き切るという、義理人情に厚い要素もある。

和田博通氏は従来の草双紙の傾向について、「お伽話などの民間説話に取材した草双紙には素朴な教訓性があらわれていることが多かったし、時代物の演劇を世界とするものでは、忠・孝などの封建道徳に基づく行状が讃美されている」[注22]と述べた上で、『親敵討腹鞁』の作品について、次のように述べている。

物語の展開の中に現れる孝・忠・信といった封建的徳目も、徹底的に戯画化・卑俗化して描かれており、それを積極的に鼓吹することは意図的に避けられているようである。そのような一切の夾雑物を排して、純粋の滑稽性のみを追求することがこの作品の目的であったと考えられるが、それは　作者喜三二の無思想性を意味するものでは決してない。先行文学の思想性を無批判に継承するのではなく、それらの一切―特に封建道徳の讃美―を拒絶するという威勢は、喜三二自身の思想性が間接的な形で現れていると言えよう。そこに、『親敵討腹鞁』の青本・黒本との決定的な相違が存したのである。[注23]

『兎大手柄』の兎の賢さや狡猾さには、兎の生態という現実的なものや、和田氏が述べる「教訓性」や「封建的徳目」といった、近世における道徳的なものがキャラクターに反映されているとも考えられる。その根底には鈴木氏が指摘した、「〈畏怖〉の念」[注24]に支えられた動物の神性や自然性というものとの繋がりもあるだろう。また、人間とは違うという一種の冷たさも感じさせるものがあると考えられる。

その一方で、『親敵討腹鞁』の兎の、頼りないが、義理人情に厚いところは、「かちかち山」の兎よりも不完全で人間らしさがある。そして、「尻喰らへ観音」における、間抜けさが滑稽な要素であることは言うまでもないが、腹切りという本来シリアスでもあり、人情的な場面でもあっても、腹から鵜と鷺が飛び立つといった趣向が取り入れられていることにより、おかしみが生まれる。したがって、和田氏の述べる『親敵討腹鞁』の「純粋な滑稽性」は、兎の性格にも表れていると言えよう。

この作品には、社会批判や当時の政治風刺といった戯作にしばしば取り込まれるブラックユーモアは含まれておらず、本来道徳的で心揺さぶられる場面も、動物の特性を活かしたキャラクターを持ち出す事で、それを諧謔的で滑稽な場面に塗り替えていると言える。それは教訓的で真面目な昔話をどこまでユーモアにできるのかという喜三二の挑戦なのであった。

第二章　肉体的特徴

本章では絵本に描かれる兎の肉体的特徴について、身体の肉付きと頭部に注目して、赤本『兎大手柄』、黒本『かち〳〵山』、黄表紙『親敵討腹鞁』の三作品を中心に比較する。

これらを比較することにより、赤本から黄表紙にかけて、どのように兎の描かれ方が変化したのか、そこにキャラクター化、擬人化する過程が見られるのかを考察する。

㈠肉付き

兎の肉付きについて注目する。表二の上の二つに比べると、『親敵討腹鞁』の兎は全体的に細身であることが分かる。この差について、先行研究では絵師の描き方の特徴が表れていることによるとされている。『兎大手柄』の兎の描写について、神立幸子氏は次のように述べている。

その顔と人間の肌は白いのですが、筋肉の盛りあがるからだつきはまったく兎らしくありません。それは筋骨たくましいおとなが兎と狸の頭をつけて役どころを演じているのであり、それは芝居から発想された描き方でしょう。その表現は、絵本の絵が芝居（絵）から離れていないということであり、この作品は、その特徴が著しく表れている例といえます。[注25]

ここで問題となるのが、『兎大手柄』の絵を誰が描いたのかということである。現在その画者は不明であるが、瀬田貞二氏によれば、赤本は作者が画も手掛けており、赤本の画家の代表

表二　兎の肉付きの比較

赤本『兎大手柄』	黒本『かち〳〵山』	黄表紙『親敵討腹鞁』
[redacted]	[redacted]	[redacted]
大東急記念文庫蔵	（公財）東洋文庫蔵	東京都立中央図書館特別文庫室所蔵

としては近藤清春、羽川珍重、西村重長、奥村政信、鳥居清満らがいる。[注26]

そして、近藤清春以外は鳥居派の影響を受けているとしている。鳥越信氏によると、鳥居派は当時芝居絵を専業としており、赤本が登場した頃、全盛期にあった。[注27] また瀬田氏は、鳥居派に属さなかった近藤清春も「江戸の人で、筆耕ともいい、芝居の看板絵も描いた」[注28]と述べている。

これらのことから、神立氏の指摘するように、赤本『兎大手柄』も芝居絵の画風が残っていると言うことができる。

また、鳥越氏によると、黒本・青本時代も目立った絵師は鳥居清倍や鳥居清経といった鳥居派であった。[注29] したがって、黒本『かち〳〵山』の兎の身体が筋肉質であるのも同様の理由と考えられる。

一方の『親敵討腹鞁』は勝川春章の影響を受けた恋川春町の画風によるもの。前の二つの作品に比べるとより繊細な体つきで描かれている。[注30]

黄表紙が刊行される少し前の時代から、絵暦をきっかけとして生まれた錦絵が世に出て、鈴木春信（一七二五頃～七〇年）や勝川春章（一七二六～九二年）といった美人画風の画家が活躍していた。浮世絵において大きな変革期を迎えていたからこそ、黄表紙の画がこれまでの鳥居派の影響を受けた赤本・黒本の絵のような画風とは異なるものとなったと考えられるのである。

したがって、赤本『兎大手柄』と黄表紙『親敵討腹鞁』の兎の肉付きの違いは、絵師の画風の違いによるところが大きいのであろう。

しかし、赤本『兎大手柄』の兎が筋骨隆々とした芝居絵風の姿で描かれるのは、そもそも兎が物語の中でも狸を倒す英雄的存在だからこそだとも言える。『親敵討腹鞁』の兎は主人公であり、義理堅く優しいキャラクターではあるが、狸を倒すなど力強いイメージとしては描かれておらず、むしろ狸や中田屋よりも華奢に描かれている。

これらのことから、各作品の兎の絵の肉付きの違いは、画風の違いが前提にあったとしても、それだけでなく、それぞれのキャラクターを反映したものでもあると言えるのだろう。

(二)頭部

続いて、頭部について比較していく。表三のように、それぞれの兎の作品を見ていくと、赤本『兎大手柄』（画面左上）では頭が白く、耳も他の二作品と比べると短めであるが形全体は滑らかな曲線である。黒本『かち〳〵山』（画面右）では白い頭に髷が描かれており、耳もふさふさとしている様子が描かれている。また、『親敵討腹鞁』（画面右上）の場合はその物語の筋書き上、特殊な設定として頭が黒く描かれているらしい。

まず耳についてであるが、表でも分かるように、滑らかな曲線で描く場合と耳の裏をふさふさせて描く場合があるようだ。これも画工の画風の違いであろうか。

赤本『兎大手柄』と全く同じような形では無いは、『鳥獣戯画』が挙げられる。これは十二世紀に描かれたもので、動物が

表三　兎の頭部の比較

赤本『兎大手柄』 [redacted] 大東急記念文庫蔵	黒本『むかし〳〵御存じの兎』 [redacted] （公財）東洋文庫蔵
黒本『かち〳〵山』 [redacted] （公財）東洋文庫蔵	合巻『腹鼓狸忠信』 [redacted] 東京大学総合図書館所蔵資料
黄表紙『親敵討腹鼓』 [redacted] 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵	

描かれた絵としては特に古いものであるが、兎の耳の先端は黒く塗られている。安村敏信氏によると、これはエチゴウサギの特徴で毛が生え変わっても「耳介の先端だけは夏冬を通じて黒い」ので、それを描いているのだという。[注31]

一方の黒本『かち〳〵山』と黄表紙『親敵討腹鼓』の耳はふさふさしている。このような耳の兎はどの時代からあるのだろうか。

絵画の中で特に古いと考えられるのが、室町時代に制作されたという『十二類合戦絵巻』の兎である。耳の右側が毛羽立っている。また、版本『獣太平記』（寛文年間刊）に描かれてい

る兎の耳もふさふさしている。

しかし、黒本『かち〳〵山』と近い年代に刊行されたであろう富川房信畫の黒本『むかし〳〵御ぞんじの兎』（一七七一年刊）の耳は『兎大手柄』と同様滑らかな曲線で描かれているが、よりシャープな形になっている。

なお、黄表紙の後代の作品である式亭三馬の合巻『腹鼓狸忠信』（一八〇九年）の耳を見ると、兎の耳先は襞のように波うち、より実際の兎に寄せて描かれており、他の作品に登場する兎とはまた異なった特徴であると言えよう。このような兎の耳の形は南蘋画風で描かれた兎の耳と似ている。

安村氏は、十八世紀伝来の南蘋画風と「円山応挙による写生的な兎図の成立」が十八世紀以降の兎図に影響を与えたことも指摘しているが、この合巻の画工も直接これらの影響を受けたかは分からないが、少なくとも、より写実的に描かれる風潮に影響を受けていたのではないだろうか。

ここまでいくつか兎の耳の描き方を見てきたが、草双紙において、時代によって描き方を区分けするのは難しいと考える。ただし、兎を物語の登場人物として描くにあたっては様々なデフォルメがなされていることが分かった。

次に、頭の部分に注目する。表三で分かるように、赤本『兎大手柄』の頭はただ白いだけで野生の兎の頭がそのまま描かれているといった形であるが、黒本『かち〳〵山』では頭に髷が描かれている。この趣向は『かち〳〵山』特有のものではなく、同時代に刊行された『むかし〳〵御ぞんじの兎』の兎にも共通する。さらにこれら黒本の影響を受けてか、合巻『腹鼓狸忠信』の兎にも髪が描かれている。兎の頭に髷を描くようになったのはいつからなのか断言することはできないが、おおよそ黒本時代から主流になったのではないだろうか。

髷を描くということは、動物が人間の姿により近付いたということである。神立氏は「自然なる動物が衣装を着けるのは人為的なもので身を装うことであり、それはまさに人間が織りあげてきた文化的表現といえる」[注32]と述べていたが、髷にも同じ事が言えるのではないか。これまでは兎の頭に人間の身体を組み合わせたような形であったが、髷を描くことは神立氏の言葉を借りれば、「動物を擬人化する視覚上の技法」の一つであり、「兎」そのものから「兎」の顔をした一人の登場人物へと段階が上がったと言える。

そして、この兎に髷を描くということでこれまで白かった頭に黒い要素を描き込むという趣向は、次の『親敵討腹鞁』の兎の頭を黒くする趣向へと繋がるのではないだろうか。

『日本古典文学全集』第四十六巻では『親敵討腹鞁』の兎の「頭の黒いのには、かくべつ意味はなく、筋のはこびのため」[注33]と解説されている。この「筋」の運びというは、物語後半で、兎が胴切りされた後、胴から鵜と鷺が飛び立った場面を指していると考えられる。

物語ではこの二匹の鳥の名前は兎の名前を上下で切ったことで、その名がついたという語源譚になっており、なかなか凝った洒落である。しかも黒と白の対比という視覚的な面白味もあ

ると言える。

しかし、兎の頭が黒いという設定は、この鵜鷺の黒白からのみ生まれた発想なのか。

黒本『かち〳〵山』の兎の頭と比較すると、『親敵討腹鞁』の兎は、頭を黒くする箇所あるいは黒くする趣向それ自体が似ているとも言える。しかも目の描き方や耳の描き方も他の作品と比べて両作品はよく似ている。

加藤康子氏は「実際は安永四年以降でも黒本・青本形態で、内容も従来の黒本・青本と大きく変わるところのないものが多数刊行されていた[注34]」と述べている。

したがって、喜三二が四十三歳で執筆した『親敵討腹鞁』が刊行されるまでの間、あるいは刊行された当時にもこの黒本『かち〳〵山』が刊行されていて、喜三二や春町の目にも触れていた可能性は高い。そしてこのことから、作者喜三二や画工恋川春町は、鵜と鷺が黒白であることだけを発想の基にして兎の頭を黒くしたのではなく、黒本の影響があったのではないかと考えられるのである。

終わりに

ここまで、『親敵討腹鞁』の兎のキャラクターについて、性格と肉体的な特徴に注目して論述してきた。

昔話の「かちかち山」から、『親敵討腹鞁』に登場する兎のようなキャラクターへと生まれ変わった背景には、近世の文芸における「人情」に代表される人間主義への関心が高まりと関わりがあると考える。

動物のキャラクター化について鈴木氏は「動物のありかたを対置させることで人間の本質を照らし出したいという欲求が存在していた[注35]」と述べている。これは神話や説話に動物が登場するかなり古い頃からのことであろうが、近世の文化において人間主義への関心が高まったことで、現実を生きる人間の「俗」部分を動物に映し出し、より人間の性の滑稽さを見ようという意欲も上がったのではないか。そこには黄表紙特有の「うがち」の見方が表れているだろう。

注

1　小池正胤 ほか『江戸の戯作（パロディー）絵本　続巻一』社会思想社、一九八四年、四一二頁参照。

2　「むじなの敵討ち」と「兎大手柄」の比較研究は内ケ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』三弥井書店、一九九九年参照。赤本と青本・黒本との比較は加藤康子「江戸期子ども絵本の魅力（承前）：昔話の絵本化・赤本『兎大手柄』の場合」『梅花女子大学文化表現学部紀要』四号、梅花女子大学、二〇〇七年／加藤康子「赤本『兎大手柄』の絵」『近世文学演習ノート』三一号、東京学芸大学二〇一〇年二月参照。

3　石上七鞘『十二支の民俗伝承』おうふう、二〇〇三年、七三頁参照。

4　今橋理子『兎とかたちの日本文化』東京大学出版会、二

○一三年、二六頁参照。

5 鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史』獣の巻、三弥井書店、二〇一一年、九頁。

6 中村禎里『日本動物民俗誌』海鳴社、一九八七年、九六頁。

7 小林祥次郎『日本古典博物事典／動物編』、勉誠出版、二〇〇九年、八〇頁。

8 中村注6書、九六頁。

9 小林注7書、八二頁。

10 石上七鞘注4、七四頁参照。

11 今橋理子注4書、四五頁。また、石破洋氏「兎神考」（『島根女子短期大学紀要』三三巻、一九九五年三月、四頁）によると、この「素兎」の説は、本居宣長が初め主張したことだという。

12 関敬吾『日本昔話大成』一巻、角川書店、一九七九年、六〇―七六頁。

13 注12書、二一七―二二四頁。

14 小林注7書、八二頁。

15 尚学図書編集『故事・俗信ことわざ大辞典』小学館、一九八二年参照。

16 南方熊楠『十二支考（上）』岩波書店、一九九四年、一〇六頁。

17 寺島良安／島田勇雄、竹島淳夫、樋口元巳訳注『和漢三才図会』第六、平凡社、一九八七年参照。

18 赤田光男『ウサギの日本文化史』世界思想社、一九九七年、一一頁。

19 小林注7書、八二頁。

20 注15書、参照。

21 注1書、六六頁、中山右尚解説。

22 和田博通「安永六年の喜三二黄表紙」『国語と国文学』第五十四巻、至文堂、一九七七年二月、三〇頁。

23 和田注22論文、三〇頁。

24 鈴木注5書、二頁。

25 神立幸子『日本の昔話絵本の表現：「かちかち山」のイメージの諸相』てらいんく、二〇〇四年、三一頁。

26 瀬田貞二『落穂ひろい：日本の子どもの文化をめぐる人びと』上巻、福音館書店、一九八二年参照。

27 鳥越信『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ』ミネルヴァ書房、二〇〇一年、一九頁。

28 瀬田注26書、九三頁。

29 鳥越注27書、十九頁。

30 瀬田貞二『絵本論：瀬田貞二子どもの本評論集』福音館書店、一九八五年、一三二―一三三頁。瀬田氏は「線の流麗なスマートなデッサンに、人物の扱いがまったく類型化して、どれもこれも鋳型のような人情風俗に終始して」いると述べている。

31 安村敏信「兎伝説と美術の中のウサギたち」カタログ編集委員会『うさぎの意匠展:日本の美』NHKプロモーシ

ョン、一九九八年、四頁。

32 神立注25、八頁。

33 浜田義一郎、鈴木勝忠、水野稔校注『黄表紙 川柳 狂歌／日本古典文学全集』第四十六巻、小学館、一九七一年、五八頁、脚注五。

34 叢の会『草双紙事典』東京堂出版会、二〇〇六年、五頁

35 鈴木注5書、一頁。

なお、本稿で用いた図版は以下の文献、ホームページから引いたものである。

・『兎大手柄』（大東急記念文庫蔵）
典拠：鈴木重三、木村八重子『近世子どもの絵本集／江戸編』岩波書店、一九八五年

・『親敵討腹鞁』（東京都立中央図書館特別文個室蔵）
典拠：小池正胤 ほか『江戸の戯作（パロディー）絵本 続巻一』社会思想社、一九八四年

・『かちかち山』／『むかしむかし御ぞんじの兎』
（公益財団法人東洋文庫蔵）

・『腹鼓狸忠信』（東京大学総合図書館所蔵資料）
典拠：電子版霞亭文庫
http://kateibunko.dl.itc.utokyo.ac.jp/katei/cgibin/gazo.cgi?no=714&top=16&Settings.x=17&Settings.y=4#
（二〇一七年五月三一日検索）